

永江

武田元明の最後について（お尋ね）

武田元明の最後につ

いて（お尋ね）

永江 秀雄

名門若州武田氏の最後の主であった武田孫八郎元明について、私がかねてから深い関心を寄せているもので、可能な限りその歴史的事実を知りたいと念願いたしております。

所で、少し旧聞に属するようで恐縮ですが、昭和四十一年十月一日発行の「福井県の光」新秋特集号の中で、福井県社会教育課の武藤正典先生が次のような記事を発表されていることを拝見して多大の興味を抱きました。

また、少なからぬ疑問をも有しますので、年来の希望を押え難く、ここに問題点を挙げて、筆者武藤先生の御高教を仰ぎたくお願い申し上げます。

なお、武藤先生の御発表は標題を「女のために出世した男」といい、「京極高次（小浜藩初代藩主）の一生」という副題も付せられています。また、これには創作とか小説とかの注記がありませんし、武藤正典先生は肩書が記されていなくても県教委の文化財担当者として県下に高名の知られていていてる方でもありますので、読者の私はこの御文章を武藤先生の御研究発表として承ったことは申すまでもありません。

一、本能寺の変に際して明智光秀が京極高次を味方にさせたことを述べられた後、武藤先生は「元明も若狭国の領主を夢みていたときだけに、彼も光秀の誘いにのって明智軍に加わったのである。明智軍に参加した京極高次と武田元明の同盟メンバーは、光秀軍と結んですでに滅亡した越前朝倉配下の諸侯や、浅井家の重臣や旧臣たちをかき集め、四千の兵で秀吉の本拠地である長浜城を襲撃したのである。高次と元明のはり切っている若い戦国武将が闘声をあ

げて、南から北からと攻め寄せたのであるから戦いは一方的であった。秀吉の母親と妻のオネは命からがら城をぬけ出し、ようやく伊吹山の山奥へ逃げこんで命だけは助かったのであるが、備中でこの報を受けた秀吉が、高次と元明の二人を極度に憎んだのも当然で、秀吉にしてみれば、実母と妻を苦しめたのであるから憎悪しても足らなかった」云々(同誌二八頁)と、極めて詳細な敘述をしておられます。

しかし、私が今日まで学んだ範囲では武田元明が明智光秀に組したという記録に未だ巡り会ったことがありません(但し、中央公論社刊「日本の歴史」十二巻、林屋辰三郎先生著『天下一統』の二七八頁には、明智光秀は「前若狭守護武田元明らに佐和山城を攻撃させてこれを奪った」と記載されています)。是非ともその事実を知りたく切望しておりますので、武藤先生の御発表内容の出版史料を細大にかかわらずお教え戴きたくお願い致します。

二、三日天下の名の如く光秀があえない最後を遂げ、その軍勢も忽ち潰滅することを述べられた中で、武藤先生は「武田孫八郎元明は、秀吉軍に捕われ秀吉の前ですぐ

永江 武田元明の最後について(お尋ね)

降参し、妻のお滝(高次の姉)が美人であったので女好きのする秀吉にお滝を人質としてさし出すことによって命だけは助けられたのであるが、若狭の神宮寺へ押しこめられ蟄居の身となってしまった」と記し、更に「北ノ庄城を逃げ若狭に向った高次は、神宮寺で蟄居していた武田孫八郎元明を説いて、若狭の武田の旧臣たちを集め、秀吉と一大決戦を計画したのであるが、このとき、はじめて姉のお滝が人質として秀吉のもとにあることを知ったのである。しかし、この計画はたちまち露見して丹羽長秀軍が神宮寺の谷をとりかこんでしまった。二人はこのときも丹羽軍の網の中を逃れたのであるが、しかし元明は近江の梅津で捕われ自害してしまった。時に天正十一年七月(二九頁)と発表されています。

他、元明が光秀に加担したために神宮寺に押し込められたという新説や、高次と元明の共同作戦計画のこと、最後に元明が若狭からわざわざ近江へ逃げたという新しい御発表について、その根拠史料を是非お教え賜りたく懇願いたします。

三、武田元明の亡き後について、武藤先生は「三十二才の若さで元明には三人の子があった。長男元義は木下勝俊と名乗り小浜城主、二男源作は利彦と名乗り高浜城主、三女のツル姫は根来村団野の名主に嫁いだが墓は高浜町の園松寺にある」(二九頁—三〇頁)と説明されています。

私は、宇佐美喜三八博士の「木下長嘯子の生涯」に関する御研究を始め諸学者の御意見や私自身の調査結果から、木下勝俊(後の長嘯子)が武田元明の遺児であるという説には賛成しかねますが、その断定には慎重であらねばならぬと存じています。

所で、武藤先生の御発表には必ず然るべき典拠(古記録や系図など)をお持ちのことと信じますので、その内容をなるべく詳しく御教示いただきたく切望いたします。特に「三女のツル姫の墓が高浜の園松寺にある」という極めて具体的、且つ注目すべき

御報告について、その裏付けとなる事柄などは是非お教え下さいませ。

以上の三点、いずれも若州武田氏の最後を知るため全くゆるがせに出来ぬ問題ばかりであり、広く日本史研究の上でも刮目されるべき事柄でありますので、この誌上に於いて武藤先生の更に詳しい御解明（特に典拠資料の御示教）を賜りますよう、伏してお願ひ申し上げます。（四三・五・一六）